



胃潰瘍 — パフォーマンスを低下させる見えない敵 —

なぜ胃潰瘍は競走馬の職業病とされているのか、飼養管理方法との因果関係について紹介いたします。競走馬と似たような管理がされている競技馬にも同様の症状が進行している可能性は大いにありと考えられます。物言わぬ馬の胃をひたひたと侵す胃潰瘍は、症状の進行とともに食欲低下、体重減少、活力減退を認め、プアパフォーマンスの大きな原因のひとつとして考えられており、競走馬や競技馬など高いパフォーマンスが求められる馬にとって重要な疾病です。馬の消化生理に見合った管理方法を工夫することで症状の改善や予防が期待されます。

・競走馬に胃潰瘍が多い理由

軽症例を含むと現役競走馬の80-90%に発症しているとされる胃潰瘍、その背景として競走馬をとりまくさまざまなストレスがあげられることもありますが、実は競走馬に特有な飼養管理方法が大きく影響を与えています。馬は本来、エサを少量ずつ長い時間をかけて食べる草食動物で、消化管もそのような食べ方に適した構造になっています。これに対し、競走馬には穀類や配合飼料などの濃厚飼料が1日に数キログラム、これらを多くても1日3回程度に分けて与えられています。飼料摂取時に分泌される唾液は、胃酸を緩衝することにより胃壁を胃酸による侵襲から防御する役割がありますが、分泌量が少ない場合はその効果も損なわれます。また、飼付け回数が少ないということは飼料を摂取しない時間帯（胃が空っぽな状態）が長くなり、常時胃酸が分泌されている馬の胃では胃壁が直接胃酸に侵される状態が続くこととなります。そのほか、朝飼付け前の空腹時に行われる調教はさらなる胃酸分泌を誘発し、胃壁への侵襲を促進するとの指摘もあります。

・牧草は唾液分泌量を増加させる

草食動物である馬本来の食べ物である牧草は、穀類や配合飼料に比べ摂取時の咀嚼回数も多く、したがって唾液の分泌量も多くなります。牧草では100g（乾物として）摂取時に400-480gの唾液を分泌するのにに対し、穀類ベースの飼料では約半分の206gの唾液しか分泌しなかったとの報告もあります。また、

胃酸の分泌を刺激するホルモンであるガストリンは、穀類などの濃厚飼料摂取時に多く分泌されます。濃厚飼料摂取量が多く牧草摂取量が少ないうえ、胃が空っぽになる時間が長い競走馬にとって、胃潰瘍発症率が高いのは当たり前ということになるのです。現役を引退し飼養環境が変わると胃潰瘍の症状が改善することも確認されていますが、これもまた当然と言えます。

・予防と症状軽減のために

胃潰瘍症状の改善薬の利用は飼養の現場で進んでいるようですが、その前に見直すべき飼養管理方法は可能な限り見直す必要があります。

- 1日に給与する飼料の内容や総量は変えずとも、
 - ・1回給与量を少なくして給与回数を多くする（空腹時間帯を少なくする）
 - ・濃厚飼料に切り草を混ぜて与える（咀嚼回数を多くする）
 - ・飼付けと飼付けの合間に牧草を自由に食べられるようにする（空腹時間帯を少なくする）
 - ・調教前に少量の牧草を給与する（調教による胃酸拡散を軽減する）
- など少々手間は増えますが、いずれも馬の胃にとってやさしい管理となるはずで、できるものからトライしてみてもいいでしょう。



Dr.Green (ドクター・グリーン) の処方は胃潰瘍の予防と改善に抜群の効果を発揮する